D 57

山田暸滿師著

但馬妙好人傳

發行者　谷本馬藏

264
110

特4ウ
762

但馬

妙好人傳目錄

○乘專寺檀徒の三女……四
○宮居村太郎右衛門……七
○豐岡津居山屋すゑ……九
○出石云左衛門の幼兒……十
○石出仁右衛門……十一
○豐岡小島屋權七……十六
○安樂寺山田正順……三十九
○福田お夏蘇生物語
○庄境佐下八右衛門

明治
43. 6. 8
内務

○多子山本智恩……四十一
○綱場西田久次郎……四十七
○永照寺坊守……五十二
○不思議の御木像……五十六

但馬 妙好人傳目錄 終

但馬

妙好人傳

山田瞭演師著

○乘專寺檀徒の三女

出石郡小坂村乘專寺門徒に三人の娘あり宿緣のなす處にやいつしか本願のいわれを聽聞して無我に御慈悲を喜びしが或時三人の者談合して我々は誠に如何なる御因緣にや御佛の御心を知らせて頂き世間も睦じく暮させて貰ふ事の有かたや御互に不定の命なれば此中誰か先立ても必ず淨土から其便りをすべしと云へば夫れこそよく申されたりと共に物語りしけるが其後姉なるもの他に嫁付餘程隔てければ常に寄合ふこともならねども互に心をよそはせて相かわらず御法義

を喜びしが彼嫁したる女定業の來るにや暫くの病にて終に往生をとげたり二人の者深く歎きながら定めて姉上は往生をとげたまふならんかねての約束なれば必ず告知らすべしと思ひ待わびたるに中陰もすぎ百ケ日一周忌もすぎぬれど何の沙汰もなき故二人の妹疑を起し互に御慈悲は頂きたやうに見へたれど人の心は知りがたし御淨土へは參り玉はぬにやと案じ居たるに三年の逮夜にあたれる夜二人の夢の中に先立し姉うるわしき姿にて我淨土へ往生をとげたり約束の如く早く告げ知らすべきの處娑婆にてこそ三年を經たれども御淨土にては低頭禮佛のいとまのみかねて婆婆にて聞しばかりの御莊嚴とは事かわり廣大無邊の御國にて心も言葉も絶果たる結搆なる處なれば思はず程をへしなり各々御慈悲をろよこばれよ程なく有漏の境界をはなれ我と同じく寶樹林の中に樂しまんはいかにと云ふぞとをほへて夢さめたり二女は感涙とゞめがたく翌朝早天に末女夢の告を語りければ中女も今其事を申さんと思ひしと互に夢の中の樣子をかたり合い是よりいよ〳〵厚く法義相續せり　（釋僧純撰）

○宮居村太郎右衛門

城崎郡豐岡の近在宮居村に太郎右衛門といふ信者あり此人は同村の禪宗寺の檀家なれどもいかなる宿緣にや淨土眞宗に厚く歸依し奉りて常に御恩の稱名を喜び或時豐岡光行寺の役僧を招き報恩講をつとめければ手次の和尚より太郎右衛門をよびて他宗の僧をまねきて勤めを受けるは如何なる心得にやと察當ありければ答に彼方はなぜに在家無智の者の直に佛になるゝことを教へて下されぬそと云へば

返答につまられしとなん其時太郎右衛門いふには明年から彼方も報恩講の時參りて下されよと云へば其節は相伴に參らんとて翌年報恩講に和尚を招きければ參詣いたされて勤行の法話もすみ馳走いたし志をも指上ければ其時和尚のいへるようは此家は外の檀家より寺を大切に取持申されけるも偏へに親鸞聖人の御高德の然らしむる處なりと喜はれしとぞ時に此人口すさみに

煩惱の雲はれやらぬ旅なれど
南無阿彌陀佛に手を引れ行く

といひて稱名怠らず喜び〳〵天保の頃七十歳にて目出度往生をとげられしとなり（同人撰）

○豐岡津居山屋する

豐岡中町津居山屋清兵衛娘するは幼少にして厚く御法義を喜び九歳の時上京して剃刀を頂き又十三歳の冬十一月二十八日手次の光行寺へ母親にしたがいて參詣いたし四幅の御繪傳をつく〳〵拜禮して御開山様御一生の御苦勞のことを御院主より聽聞いたし度きと申しければ母いへるようは今日は御世話しき事なれば明日にいたせよといへばするる申すようあすありと思ふ心はあだ櫻夜はの嵐は吹かぬものかわと仰せられしこともあるにと殘念多く思いて下向せしがはや十二月一日より病氣にかゝり家内のもの彼是と心配いたせしにするる申すには私の聽聞を一通り御聞下され私がようなる淺間敷ものを此度は淨土へ參らせるとの如來様の御言葉をたのみ力と思はれてうれしや有がたやと喜んで居ますと両親を初め兄弟にも物語いたし又外の

同行の來る度に御了解をのべて共に喜びしとぞ其後親兄弟に向ふていへるようは色々と醫者を撰びて御養生なさせ下さるゝは有がたく存じます今度は迚も快氣は出來ませぬされど弘誓の御舟にのせて貰ふた私なればかなしみの中のたのしみなりといひしが翌二十日の朝御佛檀へ灯明を上げて下されといひてしみ〳〵と拜禮をいたし大悲の母様かなと泪を浮べて喜び〳〵後へふり向いへるようは御先に淨土へ參りて御まち申すといひて夫れより父親に向いていふやうは私か手習いたす文庫の中へ金子一両と銀の簪と眞綿百目と御座ります何卒御本山へ上て下され又檀那寺に御香盤を惣金にして御寄附下され又母様の行末をたのみ申ますといひて稱名よろこび〳〵息たへはべりしとなり（同人撰）

○出石六左衛門の幼兒

享保の頃出石の城下に六左衛門といふ日蓮宗の人あり一人の男子生る依て乳母を置けるにこの乳母は淨土眞宗の流を汲みて殊に信心堅固の者なりし故常に念佛怠らずされど主人は堅く念佛を忌む故に家内にある時は心の如くならず門外に出る時思ひのまゝに佛恩を喜びしとなり然るに懷なる幼な子自然と乳母が念佛を聞きをぼへ舌のまわるにしたがいて日々念佛を申しけり乳母は家をはゞかりて門内にては稱へざれども兒は其分別なければ家にても申すを父母きゝて甚だ忌しき事に思ひ居けるに此幼兒三才なる歳の大晦日に乳母ひそかに幼兒にいふやうは御身よくこそ常に念佛を申給ふなれ去れども明日は元日にて祝ふことなれば必ず申給ふなとをしへ置きけるに翌朝

家内の男女萬代を祝して雑煮の膳に列座しける時小兒乳母が顔を守り昨日いひつる事は今朝はいふまじきやといふ父聞とがめて乳母に向いて汝いかなる事を云いたるぞと尋ぬるに乳母は困りて返事もせざれば父小兒に對して乳母はいかなる事を教へしぞいふべしといへば小兒いふたら叱られ給はんといふ父のいわくいかなることなりともしかりはせじつゝまずいふべしといへば此小兒取あへず

かりの世に露のいのちをいわふとて
今朝はとなへぬ彌陀の名號

と一首の歌を詠じける人々をどろきわずか四歳の小兒の歌詠つらぬべきやうなし汝こそ樣子を知りつらめと乳母にとふに私の念佛を聞きなれて此小兒も申たまふ故明日はつゝしみて稱へたまふなといひ

教へたるより外はおぼへなしといふ人々奇異の思をなし主人も是迄念佛を無間の業と忌嫌ひたること深く慚愧してついに御宗門に厚く歸依いたせしとなり　（釋仰誓撰）

年越の御禮しまいに南無あみだ
明けて目出度や南無あみだ佛　（暾演詠）

○出石仁右衛門

出石勝林寺門徒に正法寺の仁左衛門といふ信者あり常に人を敬いては佛菩薩の如く崇み我身をへり下りては鬼なり〳〵といひて慚愧せしとなり彼和州の清九郎に或人尋ねけるやうは今日は途中にて磔を見しかあのやうなる重罪人も彌陀をたのめば淨土へ參れませうかと問へば清九郎の答に參れますとも〳〵此清九郎さへ參らせてもらへ

ますものをといひて喜びしとなん今此同行も我身こそ鬼なりと慚愧せられしは實に殊勝といふべし　（釋僧純撰）

○豐岡小島や權七

豐岡に小島や權七といへる信者あり同所淨福寺の門徒にて家内の者の不法義なるを見ては落涙し又聞法の緣にあふては歡喜のありさま一方ならず或年報恩講をいとなみしとき雨ふりければ隣家の人來りていふやうは御同行の處の報恩講には何時も雨がようふりまする私が處は去年も今年も天氣でありしと自慢をいひければ權七いひけるようは私が不冥加者故雨がふりまして御開山樣に御苦勞をかけ奉りますといひて落涙しければ隣家の人が夫れを見聞して深く慚愧せしとなり

或時茄子苗の生へ出し處へ犬二三疋とび込みてかみ合けれは隣家の人々氣の毒に思ひ竿を持て犬をたゝきければ權七いふやうは犬の惡いのでは御座らぬ私が垣をせすに置きました故のことなりといひて詫しければ人々感じいりしとぞ時に天保九年の頃往生をとげ侍りき　（同人撰）

○安樂寺山田正順

養父郡八鹿村ノ内網場村安樂寺住職故山田正順といへる人は少き時より後世の一大事を苦にして妻子を殘せしまゝ笈を脊負ふて俗人の如く裝ひ明僧智識を尋ね求むる傍ら祖師の御舊跡を順拜せしに或國にて一軒を便り一泊を乞いしに主人熟々正順の容貌を眺め居たりしがヤア荷を下して休み給へといへば正順喜び早速座敷の上り口へ笈

を下しけるに主人は默したるまゝ一言の話もなく烟草をスパ〳〵と吸い居たる事凡三時餘の時間を經過して既に日暮に及びし頃主人正順を顧みて折角の事なれど泊める事は御斷り申す何れへなりとも可然善根宿を求められよとの言葉に正順も一時は愕然落膽せしも詮方なければハイと其儘快よく暇を告けて立去らんとするを主人又抑とゞめコレ旅の人其許の心を試した上は泊めて上げますとて意外にも夫れよりやさしき言にて其夜は正順の回國のやうすより後世の氣かゝりに付色々聞糺し何國迄廻りてもかわりし事はない我根生は替り詰めなれど替らせられね御信心一つに助けらるゝなり此處一つ夜か明けたらこれぞ疊の上の御舊跡巡り早く國元へ歸られよ御國には嘸妻子の待ち詫つゝあらんと懇ろに諭して歸らしむ夫れより正順は日暮只御助けに替りなしとの御慈悲を貴く喜び檀徒の教誡最懇切にして誠に近在に稀なる仰信家となれり然るに去る明治二十年七月九日の晩不圖腹痛起り針灸醫藥以て種々療養を盡すと雖も其効なく後には肺癰と變し四五名の醫師立會の上匙を取るも兎角何の驗もなし國手は何れも匙投げられたり正順は病苦烈しき中にも稱名の聲斷る間なく腹痛を抱へながら檀徒に對して法話を繼續せられつゝありしかるに十六歳になる長男河州にありて九日の夜父の死亡にあい門前迄葬送せしと夢む其夜寢床を離れて膝を組みたるまゝ終に曉に至る翌朝友人の父（萩本聞靜）に暫しの暇を乞い汽車にて京都へ赴き知已の車夫を雇ひ腕車にて二日目卽ち十二日午後八時歸着せり檀徒は本堂と庫裡に伽をしつゝあり門前の腕車の聲は定めて前尅招きにやり

し國手の來れるならんと思ひしに案外にも兄坊の歸院に驚き電報も書簡も父公の許しなき故沙汰せざりしに何故病氣と知れしやと皆々不審を懷けり父正順の心は兄坊は今修學中故病氣を報して引戻せば大に障になる事を氣遣い音信を見合せ居たりしに奇夢を感し歸りしは父子の緣の厚きに依る父子の挨拶濟みし後正順言ふ父はもはや本復難ければ其方父に代りて檀徒の教諭を忽かせにする勿れ能く勸め導いて一蓮託生を期せよと其翌十三日の夜は中祖大師の御逮夜なれば病褥より手水をつかい御内佛を聞きて御灯明を棒げてよと兄坊は言ふがまゝにせられければ腹痛を抱へヤーレと叫びながら偈文を拜讀し終りて檀徒に告けていふ苦痛甚しきは轉重輕受の御利益と喜び語る翌十四日午後五時隣家の長七といふ同行傍にありて介抱しける

に長七〳〵と呼びて今參ると告げければ其由を集り居たる同行に知らせしに本堂の方を向き暫く御稱名又内佛に向いて三唱念佛し亦告げて今こそ參るといひて合掌し高聲に「南無ゞ」と唱ふるまゝ息絶へたり時に享年四十七歳かゝる人なれば檀徒は勿論近在の同行見舞に來り合ひし者一同聲を惜まず泣悲むも詮すべなければ其翌々十六日正午叮重に葬送の式を行ひ濟せり夫れより村内一統五十日間嚴重に精進せりと當人存世中に法味を愛樂せられし有樣は今尙人口に膾炙せり（東京寄日新報）

○雷鳴院釋正順辭世

よとなゝの歳まで婆婆に長らへて
今おさらばに參る彼岸

あら嬉し拾ふた歳が極樂の
出つもりなりと聞くにつけても
顧りみば首枷てふ妻子あり
仰けは嬉し法の花園
憐れなれ會ふほ別れの初めとは
定めなき世の習なりせば

○おなつ蘇甦物語

爰に但馬の國豐岡のほとり福田村といふ所に吉助といふて有德なる百姓あり宗門は淨土眞宗則豐岡の城下眞光寺の門徒にして單信無二の信者なりけるが其妻おなつは夫にかわりて後世共菩提ともしらず慳貪邪見にして念佛をいまはしき事におもひしかば寺參りはいふに

及ばず我家の內佛へ御禮を遂たる事もなし不法不信の者なれば夫吉助是を歎きたとひ此世にて夫婦のしたしみある共暫らく假の旅すまひ追付命をはらん時は業に任せて引別れふたゝび廻りあふ事叶はず此世はおろか未來まで夫婦兄弟一所に寄集りたくをもはゞあみだ如來の大悲にすがり稱名念佛をすべきよし每度すゝむれども女房一圓聞入ず我身に家燒人殺したる覺もなし地獄へ墮べしともおもはずしかればあながち後生とて格別願ふにも及ばずとて聊か改る心なし夫いよ／＼なげき手次の寺へ參りまづかやう〳〵の事何とぞ御出下されゝ勸め給はるやうにと願ひしかば住持も吉助が志を感じさつそく參られて彼女房に對し申されけるは亭主吉助には多年御法義に立入り無二の信者なるに其元にはそれに似ず寺への參詣もなく內佛へ朝夕

の御禮も申されぬよし承るが如何心得られたるぞ老少不定の世のならひ俄に無常にさそはれなば臍をくふとも及びがたし能々思案あるべしと申されければおなつ申には仰せ御尤に存じますれども家内せはしく朝夕の食ものから夏冬の衣類まで私一人の身に掛り候へば世帶と佛法とやら先後生よりは今生の事にからまされてをのづから御寺へも御無沙汰いたし佛前へ御禮もをふよそに成り候と曰かしこく申せば住持成程申さるゝむね一往御尤なれども未だ大事といふ所へ氣の付ぬ故なりおよそ一日の大事一年の大事一生の大事といふ事有一日の大事とは飢餓にありとて三度の食物一度かけてもならぬ故朝おきて目をすり〳〵飯も炊ねばならず茶を煎じねばならぬなり又一年の大事は裘葛にありとて冬のわた入夏の帷子いづれもなければな

らぬものゆへつね〳〵心懸るなり扨一生の大事は死生にありとて人間一代に死ぬるほどの大事はなきなり生者必滅會者定離のならひなれば此世に生れ來たる者一人として死を免るゝ者なし然るに死んで行先未來の魂の休め所を用意せぬは身しらずといふべし元祖聖人の御歌に「身をおもふ人こそ實にはなかりけり憂かるべき世の後をしらねば」と詠じ玉へりたとひいかばかり此世大事とおもふとも無常來て誘ひなば我家の忙がしきも用事の有もその言譯は立まじ元より獨生獨死獨去獨來の金言なれば契りをこめし夫婦も血をわけし親子も死出の旅路に手も引ず勿論貯へたる金銀財寶も身にそふ事なしつくりにし罪を供にて只ひとり泣々こゆる死出の山路には後悔の涙より外に隨ふ物はなし然れば早く後世を願ひ念佛せらるべし但し後世

を願へばとて此世の業を捨よとにはあらず一夜の宿も漏ては居られぬなれば商ひをもせよ奉公をもせよ獵漁りをもせよ過去よりの約束なればたとひいかなる事をしてなりとも兎も角も此世を過し御法義を喜ぶべし人々の身貧成了簡からは我身にさせる惡事はなし惡趣へ行べきやうやあらんと思へども銘々の身には十不善業とておそろしき罪過ありて地獄餓鬼畜生の三惡道の業因なれば未來の苦果は決定のがれがたし然るに本願を信じ御慈悲に縋れば罪業深重のいたづら者を御助有に露ほども疑ひなしいざ如來を賴み奉り御法義に入られよとひたすら勸られしかば女房少し心やはらぎて其本願と申御慈悲と申事いか成譯にて候ぞくわしく示し給へとあれば住持の對へにさればとよ本願と申は阿彌陀如來に四十八の本願まします中に別して第十八の願に十方衆生と誓ひ玉ひていかなる女人惡人なりともろ〳〵の雜行雜修自力の心をすて〻一心に我を賴まん者を極樂へむかへんとの御誓願なり然る所女人の身は疑ひふかふして十方衆生とはあれども五障の雲深く覆ひ三從のかすみあつくたなびきて罪業重き身なれば若本願に漏やせんと疑わん事を恐れ重ねて第三十五の願に女人成佛の誓ひをたてまします是にて知べし如來の本願は出家よりは在家善人よりは惡人男子よりは女人を正こし給ふなり斯る不思議の御法にあひ奉りながら本願を信ぜず御慈悲を疑ひてむなしく元の三惡趣にかゑらん事まことに口惜き事にあらずや抑如來の御慈悲とは觀經に佛心者大慈悲是也とありて迷ひの凡夫のこゝろにて貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性侵がたしとおそろしき根性なれども如來の

御心は我等衆生を何となく一人り子のごとくあはれみ玉ふ御慈悲なり此御慈悲を基として六八の願をたて玉ひ永劫の御辛勞によりて願行具足の名號を成就し給ふ南無とは衆生の如來を賴む機の方なり阿彌陀佛とは賴む衆生をあやまたず助玉ふ法の方なりしからば賴むは衆生の力かといへば否賴む機までも彼尊の方に御成就なされての南無阿彌陀佛なれば行者の物にてはなきなり故に祖師聖人の歸命者本願招喚の勅命なりとの給ひて如來の方より我を賴め〳〵とよびかけ下さるゝ眞實の御喚聲を南無とも歸命とも云なり其御聲によびおこされて御助候へと賴み奉る心にはなるなり其賴む者をあやまたず攝取して助玉ふを阿彌陀佛と申奉るなり然れは賴む機もなき者のために賴む機のはたらきまでも六字の中に調へ給ひて機法一躰に御成就

ありし本願の名號なり斯のごとく本願成就して今は賴む歟今は信ずる歟と待受玉ふ事須臾も御油斷なし故に金剛堅固の信心のさだまる時をまち得てぞとのたまへり譬ば火に觸れば燒るなり水に觸れば濡るなり彌陀を賴めば必ず助るなりされば往生程の一大事を賴み奉る一念に定め下されたうれしさから存命てある間は稱名相續して御助の御恩を喜ぶなり能々思へは衆生も多き中佛の御姿に似よりたる人間と生れ殊には佛法繁昌の時節にあひ宗旨も多き中御開山の御流を汲む御門徒と生れたるは能々不可思議の御緣なりと存じて急ぎ御慈悲に立入らるべしと念比に勸化ありしかばおなつ宿善や爲ゐたりけん立所に邪見の角おれて座にありがたふなり左樣の事ども存ぜず唯今までは信じ奉らぬのみならず却而あしさまに申たる事のくやし

さにかゝるいたづら者なれ共是を此まゝにて御助下さるゝ事のさて〳〵ありがたひと是迄の不信々さはうつて替つて夫の吉助にも倍したる信者となれり是全くおなつが賢きにもあらず勸むる人の手柄にもあらず阿彌陀如來深重の大悲衆生の骨髄に染みて充滿玉ふゆへかゝる御利益のまします事よさいよ〳〵賴母しくこそ覺ゆれおなつ夫より後は朝夕両度の御禮はいふに及はず晝夜幾度となく御前へ參り泪をながしし〳〵ご御禮を申上餘念なく喜びたるが其後此女房妊身いたし十月みちて出産の期にのそみしに殊の外の難産にて七日七夜の間もみにもみてせつなきくるしみいふ斗なし親類共打寄良醫をまねきていろ〳〵手を盡せごも次第に體もよはり命つゞきがたき樣子に見へたるが苦しき中にも稱名の聲しばらくも斷間なく折々申け

るは斯る難産にて暫くくるしむすら堪がたきにまして地獄に墮て多百千刼の間嘖刺磨搗の苦患を受ん事はいかばかりか悲しからん然るに彼尊の御慈悲によりて生死流轉わ今生を限りとして追付淨土にうまれ樂の身となし下される事の貴さを思へば身のくるしきに付ても却而御慈悲が喜ばるゝそさていよ〳〵稱名の外他事なく喜びいさみけるが寶暦十辰年十月二十七日の夜五ッ時三十一歳を一期として終にむなしくなり行は夫は勿論父母兄弟寄あつまり歎き悲しめども會者定離の娑婆のならひ今更せんかたもなし野送りは翌る二十八日九ッ時と定めて宿坊眞光寺へ案内せしに彼寺の住持も今日御逮夜の法談し畢り間もなく急病にて命終せられたりとて寺内取込の中へ吉助女房往生のよし申こめば人々驚き實に不定の娑婆の分野と申あにり

扨翌日二十八日四ッ時とおぼしくて沐浴すみて棺に納め佛檀の前に居し置るおなつ忽ち蘇甦亭主吉助を呼聲の聞へければ參り合たる一家一門打驚きこれ何事ぞと仰天しけるが何事なくたゞよみかへりたるなればさつそく棺より懷き上げ本の病狀にうつしいろ〳〵と介抱して心地いかにと尋ぬればおなつ目をひらき傍りを見廻し扨はよみかへりしなり切角淨土へ參りしに又もや珍しからぬ所に歸るあら殘り多やとのみ申居たりしが暫く有て難なく出產し子は死體にて生れたれども母に別條なく先以目出度しさいよ〳〵いたはりけるにおなつ身の苦痛たすかり次第にやすらかになりて申けるは扨死ぬると申事人の思ひたるとは大きにちがひたゞ古き敗軀を新しきに易る計なり死ぬ物は體なり死なぬものは精神なり魂の落付所に體は出來るなり其ゆへは昨夜しきりに苦しみつよくなりて今を最後と思ふ時俄に心のくるふ心地しけるが目を開ば直に極樂淨土にてありけるさても不思議や唯今まで病の床にくるしみてありしに忽ち紫摩黃金の姿通力自在の身となり心には一切の事を知り目には十方世界を見わたし耳には十方の有情非情の聲を聞三明六通無碍自在と承るは此事にやさるほどに娑婆の我家を見れば親類眷族寄集り我なきがらをさりまき此世の名殘をおしみさめ〳〵泣悲むありさまなどかゞみに寫すがごとく淨土の聖衆數限りもなく我前に來らせられよふこそ參られしぞと手を取て喜び給ふ衆中を見れば皆世々生々の父母兄弟知音知己なり曠劫已來六道輪廻のあいだ人間となり天人となり地獄に入り餓鬼道に墮畜生道の牛馬六畜ゑもゑゝぜぬ姿と成て迷ひしむかしの事

共只今の事を見る樣に宿明智を以て明らかにしり侍りぬ大海塵沙の菩薩たち互ひに宿世の物語して娑婆の苦患を語りあひ今日淨土の快樂を喜び供養を受つ供養しつ種々の悞樂を極め玉ふこと中々言葉には述がたし扨又極樂の大地七寶を以てかざり給ふ其地の平坦なる事澄わたりたる水のごとく種々の妙華雨ふりて美麗事いふ計りなし虛空には常ならぬうつくしき鳥微妙の聲して囀るを聞ば何となふ暖和に心開けて難有事かぎりなし向ふの方をおがめば黃金の山を餝りたるごとく見へ給ふは則淨土の御主阿彌陀如來光明を放ちて十方世界を照し玉ふ右と左に立玉ふは觀音勢至なり此三尊をおがみ奉るに難有さ何と喩んかたもなしさて又五里十里も有べきとおもふほどの寶づくしの宮殿樓閣數かぎりもなふたち並びてしかも二楷三楷と重々

にかさなり七寶の欄干檐に瓔珞のかざりあり寶の樹五里七里もつゞき花咲亂れてその香ひ薫郁ごとして香しき事いふばかりなし風玲瓏珞ありて風そよめける微妙百千種の音樂聞へてその面白さ貴ささたとへん方もなし八功德の池には五色の蓮花鮮に開きて花ごとに五色の光あり池の底と四邊の道とみな七寶莊嚴なり菩薩聖衆光明赫奕として蓮に乘給へば蓮華自然と池中をめぐり手に掬ばんとし玉へば水をのづから思ふ所へよりて只何事も心に思ふやうなり風そよめきて寶地の波を揚れば水より自然の音樂あらはれておもしろさ難有さ申も中々をろかなり扨宮殿樓閣の中よりは先々に往生し給ふ菩薩達みめうの美しき衣をめし花をかざりたる裝ひにてさも嬉し氣に大勢うち連だちて如來を圍繞なされ御說法を聽聞して喜び玉ふと見れば又此

方には觀音勢至無量の聖衆に對して妙法を說玉ひていと賑はしき御ありさまなりあるひは菩薩達手に手に樂器をとり音樂を奏して樂しみ玉へば百味の飯食自然にそなはりて快樂し給ふ所もあり又はうつくしき天人宮殿に乘ゐら〳〵と浮雲のごとくにて虛空をめぐるもあり又は雲に乘て五人十人づゝ連だち遊び玉ふもあり左右かと見れば他生淨土の菩薩たち蓮華に端座して來らせ給ひあみだ如來をはじめ菩薩聖衆迄を色々供養し給ふもありその結構さ貴とさ中々申盡しがたしこゝに難有は我身たゞ今まで病の牀に在て垢に塗れたる汚穢しき姿行步も叶はぬ不自由な身ながら息引取と覺へて夢のさめたごとく彼淨土に往生しければ十方世界を見る事鏡にうつすがごとく明らかなり然るに此娑婆世界を見渡したるに每日〳〵死ぬる人は幾千萬

なれども淨土へ參る人は千人の中に一人萬人の中に四五人も覺束なし何れも心を改めて淨土を願ひ玉へ先此村中に家かず五十軒あれども昔より淨土に往生したる人は唯九人のみなり扨今存命の人に參るべきは村中に只貳人有壹人はそれに居給ふ角左衛門殿年來喜びの甲斐ありて決定往生の人なり今壹人は吾夫吉助なり此兩人ははや淨土に姿を成就してありゲ樣に申共證據なき事はよも實にし給ふまじ其證據として何れもの疑ひはらす事有一ッには私此度は蘇甦候て實の往生は是より四年の後寶曆十三年未三月十五日の日中に再び往生を遂るなり是一ッの證據なり二ッには私が母人來年巳の九月二十日に命終らるゝなり是又一ッの證據なり此事は淨土にて御宗旨の御開山まのあたりの御しめしに汝我敎を信ずるによりて今此淨土へ來れり

去ながら其方が壽命未つきず是より四年の後を待べしとて上みにいふ通りの年月日時を告しらせ給ふ其上我が身過去生の因緣を說て聞せ給ふ樣は汝過去にても生々世々女人の身をうけしが今生よりは十六生以前富貴の家の妻となりしにその時夫に一人の妾有しをふかく嫉みてひそかに毒をあたへ殺したりしに彼妾最期に及びてあら憎や嫉ましやゝがて此怨をおもひしらせんぞと罵り狂ふて命をわりしが其念力にて世々生々汝につきしたがひあるときは夫となり或ときは子となりていろ〳〵と身をなやましくるしめつるなり此度も子となりて汝が腹にやどりしも彼怨念のなすわざなり汝は忘れつらんなれども死かわり生れかわり此度にて丁度十六生を經たり然るに汝宿善の催ふしにて如來の本願に縋り單信無二の行者と成がゑへに永く

論廻の繫業をまぬかれて淨土に往生する身ことはなりたり胎内の子といふは汝が爲生々世々の仇なるが此度は汝が信德によりて世々の怨をはらし其身も天上の果報をうけたり扨又汝が母も來年九月二十日の午の刻に命終るべし此者常々後世にこゝろざし念佛すれ共惜ひ事は本願を信ぜす佛智を疑惑するゑへに順次の往生は叶はず汝少時娑婆に返らは母はいふに及ぼす其外の人々にも告ていふべし努々本願を疑ふ事なかれいかばかり念佛申たり共本願を疑ひ佛智を信ぜぬものは報土往生叶はずと傳へ聞すべし汝が往生は四年の後にあれば夫までは黃金の蹇躰しばらく此方に預り置べしいざ歸れとの給ふとおもへはたちまち蘇甦て此穢身なり扨かの淨土に參りしとき三十二相の形にて七寶の蓮華に座をしめ金色の光明をはなちて鳥の飛がごと

くわが前に來り給ふを見れば我は眞光寺なり其方と同時に娑婆を出たりしが其方我がをしるに從ひ如來をたのみ念佛せしほどに今此極樂へ生れたるぞ去りながら婆婆の命いまだ盡ざれば暫く娑婆へ歸るなり若娑婆に還りてあらば同行にもよく〳〵此事を申傳へ誘ひ來るべしと仰られたり今蘇甦りて聞ば私と同時に往生なされしとの事なり扨〳〵たましひ魂の淨土に生るゝ事のはやさよ我身病床にありて今が最期と思ひ眼くらふと覺へて目を開ばすでにそこが極樂なりいづれも能思ふても見給へ今生は夢幻ぞかし此體はしばらくの假物なり然るをいつまでも生延候樣におもひて後世を願はず如來を賴まずうか〳〵として年月を送り候はんはまことに淺間しき事なり淨土の阿彌陀如來は申に及ばずもろ〳〵の菩薩たちも迷ひの衆生の娑婆に着して淨土を願はず浮世をいとふ心のなきをいかばかりか不便にも亦笑止にもおぼしめさるゝ事なり然ればみな〳〵日頃の心をあらため彼尊の御慈悲に縋り奉りて一向に念佛し此度淨土の往生をとげ給へかしなどねんごろにすゝめけり人々不思議の想ひをなしこれまでは不法義にてありし人も法義に立入不信心の輩も俄に信心を催ふし在所はいふに及ばず近鄕近在まで聞傳へて法義にもとづく者多かりしとぞ其後おなつ我母にも淨土にて聖人の仰せられたる御意の趣申聞せ委細に物語しければ立所に疑ひをはらし難有き領解となり往生の日限まで極りたる事を聞し上は指を折て日をかぞへつゝ往生の近付事をのみ待受しが月日に關守なく翌年九月二十日にもなりしかば今日は娑婆の出立なりとて早朝より佛檀の前に座して一心不亂に念佛しけるが

此事兼てより諸方に聞へしかばさらば往生の樣子を見て結緣せんと
て人々寄集りまもり居たるに不思議なるかな午の刻と覺ゆる時分聊
所勞の氣色もなくて左右に向ひ我は罪業深くして五障三從の身なれ
ば千刧萬刧にも迷ひを出る事の叶はぬ身なるを此度阿彌陀如來の御
慈悲によりて輪廻の繫縛をほどかれ目出度極樂の往生を遂奉るなり
いづれも彼尊をたのみ唯一心に念佛し給へ蓮華をわけてまち申さん
といひて南無阿彌陀佛〳〵と高聲にとなへて眠るがごとくして息絶
たり去程に其時參りあふ人々奇代不思議のおもひをなして隨喜の泪
に袖をしぼらぬ者はなかりしとぞおなつは彌增に歡喜をまし淨土に
て聖人の仰せられたる御意を申出してはさぞ聖人の待かね給はんぞ
とて一日を暮せば一日近寄事をよろこび一夜をあかせば一夜近付こ

とを喜びいさみて行住座臥に稱名念佛斷間なく明暮往生をまちうけ
居たり人來りて往生のやうを尋ぬれば極樂參りとは何の仔細もなく
我働入らず如來の他力にて參らせ下さるゝ事なれば行者の方に造作
もなく勤めも入らず唯此身は罪惡生死のいたづら者にて何の取得も
なきものを如來深重の御慈悲をへ一念賴み奉れば深くよろこびまし
〳〵て直にをさめ取せられ此に居ながら極樂の人數となし下され命
終り次第淨土へ御引取下され安樂自在の身となし下さるゝぞと落着
御禮の爲には寢ても覺てもへだてなく廣大の御恩を悅び我身のあし
きにつけても斯る罪業深重の者をいかなる大悲の如來にてましませ
ば御見すてなふすくひ給ふ事の難有さよと存じて御恩を喜ぶばかり
なりたごひ病の牀に臥て腰膝ぬけ手足叶はずして參り下向もならず

又は目盲で如來の御姿をおがむ事叶はず或は舌噤て念佛申事叶はぬ身なり共心の底に本願を信じて佛智の不思議を疑はねば往生に違ひなし過去よりの約束にて野山海川にて命終る共又は刄に身を果し火に燒れて死ぬる共臨終善惡にはよらず平生一念の時に往生を定め下されたれば死さまは如何有とも往生をとげ奉るには毛頭疑ひなし我身はいろはの縱緯も知らず愚痴なるくせに欲心のみ深くして罪業ばかり造り重ねつる此身なりしを御念頃なる勸御化を聽聞して立どころに疑はれケ樣の者を御たすけ有事のたふさよと旦暮御恩をよろこびしが難產にて命終りたれども血の池へも墮ず地獄へもゆかずして直に極樂へ參りしなりこれ慥成證據なり御寺の御住寺も兼てケ樣に御すゝめ有けるが其領解にて往生し給ひ私も其御勸化にてかゝる

領解となり同じ淨土へ往生を遂けりされ共未娑婆の因緣盡せずして一旦は蘇甦候へ共往生の年月日時も定りてあれば追付參るべしとあけくれ死期をまつはかりに候と語りけるなり此事は直に彼おなつに逢ひてくはしき噺を承り書付置なれば少しも相違なし願くば是を見ん人聞ん人みな〳〵隨喜の思ひをなして同じく一味の信心にもどづきもろ共に今度の一大事の往生を遂給へけかし　（釋義貫開書）

○庄境佐下八右衛門

城崎郡三江村内庄境村佐下八右衛門（八十四歳）は老衰して眼さへ不自由なる身にも拘らず平生御法義の心がけ迚もなかりしが或時西教寺住職宮垣信海氏の教誡より未來の目を醒されてよりは深く御法義を信じ朝夕兩度の御内佛の勤行は勿論吾宅より手次寺（西教寺）

迄に三町餘り隔たりしに入法以來二ヶ年半計り四季の差別をいわず毎日の參堂怠りなく此他法座とあれば欠かさず參詣し法味を愛樂し落涙して喜び吾宅は少し山の端の方に位せるを以て佛參する晩には稱名諸共に四つ這に道をさぐりて參るを常とせり然るに去る明治二十五年九月病蓐に就てより身隨思ひの儘ならざれば唯病床にありて佛恩の廣大なることを思ひ浮べて彌増に稱名相續せり翌る十月中忰八左衛門は親父の容體を見て今日は山に樵に行き度も妻（きの）も市に買物にやりたきも何れも見合せんといふも病人きゝて兩人共必らず此の親翁を氣遣ず家の内の用事を早く辨ぜよとて强いて諭し出せり兩人は夫々用事をすまし同日正午前に歸りて病人を見れば蒲團の中にあらず病床より這い出て佛檀を開き兩手合せて珠數かけたるまゝ佛前に打伏になりて息絶へてありしとぞ

世の信者諸子よ往生は不可思議の願力として佛の方より治定せしめ給ふとあれば其上命のあらん限りは報謝の經營少しく此等の手鏡をみる所ろあれかし（釋暸洲撰）

○多子村山本智恩

美方郡照木村内多子村願入寺の禪門山本智恩なるものは弘化元年辰十一月八日生にて當五十二歳なるが該者は若年の頃より慈惠正直を本とし法義に深く心かけありし人なるが二十歳の夏本山に於て得度し法名を智恩と頂き二十一歳にて妻を迎へしも事故ありて離緣せしを以て後妻を迎へんが爲め種々心を煩わせし結果翌年正月より三月迄耳病にて醫療を盡せしも其功なくて聾者となりしが是れ全く前業

の追ふ所と觀念し明暮法義をのみ喜びいまは斯る聾者となりし上は名僧智識の法話さへ聞く事も叶わざれ共相應の讀書に通ぜしを以て名僧知識と知らは筆先の教誡を乞い且雜書等を閲するにも唯安心の書に目を注ぎ居りしが何時となく解信の德か宿緣の然らしむる處か忽て本願の御所謂れを明らめ行住座外に佛恩を喜びせめては御恩報謝の爲め本山の御取持なりとも致さんものをと吾が國中は勿論他國迄も走せ回り有志の婦女或は童男童女の厘位までの懇志を募り集めて是を本山に納め厘位に至る迄の受納書を願ふて以て懇志者へ屆く斯の如くすること毎年五六回より下らず吾宅より京都本願寺迄は里數凡四十五六里の處を毎年數回の上京懇志の持參怠ることなし當年も早三ヶ月間上京すること三回に及ぶと聞く就中去月中も例の如く

懇志を納めて城崎郡三江村まで下向せしが年の加減よりは痛く疲衰せし故心に思ふ樣最早娑婆の定命も當年に限るとすればせめて當年は別して御取持申上度きものと心附きし儘我宅まで歸り附かす途中より引返し又有志應分の賽錢を集め上納して此間下向の序予が宅に立寄りしを以て予は該者の信得を試さんが爲め筆紙を取出し年來數度の參京懇志の取持に盡力の段感じ入る次第なるが去りながら知恩報德を先にし名利を後にすること專要なり云々書て差出せば兩眼より落涙止まらず稍ありて云ふやう此の愚者名利の爲のみ恥入る子細なりと泣て懺悔し又難有御教誡に預りしと再三謝辭を盡して喜び期に後れて又來りて慇懃の禮を述る下にも稱名の聲絶る間を知らず予は該人の懺悔且其振舞を見て深く感歎し翻て他より聞けば當人は平

常の振舞さいひ佛前での行狀通常の人の及ばざる處多しと今其の平生の心得の二三を擧ぐれば

知恩は凡べての事を人より教示に預る時は何時までも忘るゝことなく其時の大恩に酬ゐん爲とて種々の手土産を持來り丁寧に禮を述べて歸る癖ありと

知恩は旅行中六親眷屬の忌日には必らず僧に看經を願ふを常とす

知恩は有志の賽錢を纏る時は道すがらの宿々の佛前に供へ別嚢に納れて所持するを常とすと

知恩は他より依頼せられて佛具等を京都より求め歸りの節惡奸の爲に奪るゝことありしに途中より京都へ引返身に纏ひたる衣服を賣りて本の如き品を買ひ償ひて下向す品主後に其事實を聞き其の正直を

感じ代の半額なりとも償わせてよと云へば否々吾前世に於て人の物を盜み取りし事あり、しならん其報にあいて少しは罪も亡しならんと喜び居るに存外の御言を頂くと恥づる色面に顯はれもといふ

知恩へ或同行より年々凡幾度程上京せらるゝやと問ひし時答へて曰ふ我が年來の上京は皆御恩報謝の爲なれば幾度といふ數は更に存ぜず强いて御承諾致したくは阿彌陀樣に御伺ひくだされよと

知恩は上京の節は京都宿屋に於ては當人の信篤を知るものは宿賃の幾分を減ずることある時は悉く之を本山へ納め歸るといふ

知恩は當春より眼非常に薄く杖に縋りて上京する有樣是にては本山の御取持も不都合になり行くことの殘念さよとて京都の或病院へ一周間計入療せしも其効も別に顯れぬ也へ是れも地獄の果報今生の化

報にあらはれしものならんと入療のことは思ひ止り此上の足手の通ふ間は杖にすがりてなりとも佛の大恩九手が一無を報じ度きものと耳眼不自由を省みず杖を片手に只管御稱名諸共有志の取持に盡力せらるゝといふ

本月三日本山虎の間に於て懇志を納め退かんとする時大學林より呼出され奇特を感するとの思召にて白地金入の輪袈裟幷に木珠一連を下賜せられたり（從來六字ノ尊號頂戴セシコト數度アリトイフ）と當人は彌々大善知識の御鴻恩を感戴し斯程まで此愚者を御憐み下さるゝ事なれば大恩深き親（太善知識ヲ云フ）の傍を離れともないとて感泪に袂を霑しつゝ下向せられしとぞ

嗚呼山本氏は實に知恩の名に背かず善くも斯くありつること哉是れ

も全く信德の然らしむる處ならんと感ずる儘當人二三の行狀を見聞するに任せ茲に錄して法義篤信者に示す御慈悲を喜ぶ御助緣とならは幸甚因に智恩は六十歲迄念佛相續しつゝ東西兩本山の取持おせられしが終に去る明治三十八年八月三日目出度往生とげられたり

（釋曉演撰）

（明治二十九年四月四日日本一第四十九號投載セルヲ拔出ス）

○綱場西田久次郎

養父郡八鹿村內綱場村第七十五番地西田久次郎（七十六）なる者は妻（きく）と三男一女と五人の家內にて睦じく世を渡りけるに親父久次郎は性來御法義には左のみ心懸とてなかりしに昨年八月下旬より不圖病床に打臥してより以來妻子心を盡して種々に醫師の手を煩すと

雖ども其効更に見へす醫師のいひけるやう最早七十餘の年を重ねし身にて老衰せしものなれば左ほど腹藥するにも及はぬことなれば只介抱を丁寧にするに如かずと夫より醫師は兎角に藥を呑むことを禁ぜられ本人は老年の年也へ所詮今度は平癒覺束なしと思ひ定めける其後貧道も當人の望に應して枕邊に付いて法話をなし色々語り合ひしがよく〳〵宿因の深厚にや殊勝にも法を慕ひ喜ぶ氣色最と現はれ其後病床に在りても神妙に煩ひ居て友同行の見舞に來ることあれは病苦の其中よりも一口難有ことを御聞せ下されよと……かゝりし程に近附し程のものは善き心附なりとて互ひに御法義の相談をして歸らぬものはなかりき或時幼少よりの友達來りて世間の話しをしければさていふやう此翁は此世に長く止るものに非れば一言なりとも

此老翁が頓て仕合せを得させて頂く話しを聞せよとの言葉に其友是迄法義に一向心懸なきものとて默然自失答ふる處なきまゝ實に恥入る次第なりと云ひければ久次郎は恥しいは相御互なれば恥しながら嬉しや頓てはナーと涙に咽びたる體にて念佛すること良暫し見る人聞く人感ぜざるはなし又家内のもの日に三度の食事を仕舞毎に病人の機嫌を伺へば我身を勞り氣遣いくるゝは妻子の情愛なれど一言なりとも貴きことを聞せてよと両手を合す故家内のものも何の答ふることもなく只南無阿彌陀佛〳〵と稱ふれば其稱名の聲を聞いては尚勇ましげに高聲に念佛する其聲の殊勝さに勵まされて自と家内中念佛する癖になりぬ而して朝夕悴の御内佛へ勤行する前には如何なる寒天といへども家中の戸障子を開かせ我病熱の臭氣を振ひ清めて後

御佛檀の扉を開かすこと丶なし居りしも長病のこと故身體余程病疲れて或日大便を寢處にあやまつことあり娘の(すゑ)とて本年二十二才なるが早速取かへ新に寢處を仕直して臥さしめけれは勿体なやく親樣の膝元で思はず糞穢を漏せしことの恐れ多やと始終誤り入りて夫よりは何程病氣で苦しくとも必らず介抱人に負れて厠に至らざれば大小二便することなし本年一月十九日妻子を枕近く召寄せ長〻の御世話に預りし此親父も最早今明の中此世に暇を貰ふものと思はる丶故早く親戚を招き吳れよと云ひしも家内の者は病み耄けて言る丶ならんと其儘にして親戚へ披露もせで居たりしに此事をもれきいて翌二十日近所より内輪の者共集り來るに大勢に對して何方も段〻の御厄介此老翁も頓て參らせて貰ふほどに兄弟親類物爭ひをせぬ

やう中善くして何卒御法義を大切に賴む〳〵老翁は早參りて半座を分けて相待つそやと他は何事も語らぬ故妻(さく)最此外に言ひのこす事はなきかやと問ひたれば他に何用もなしとて唯南無阿彌陀佛〳〵と唱へて正午まで過けるが午後三時頃妻子病人の枕の傍に居たるに俄かに起上りてアレ〳〵あの奇麗なる見事な花か見よアノ花の美しさ又あの美事な鳥は何といふ鳥であるかと兩手合せて拜む故妻は老耄せしと計り思ひてドレドコニドンナ花が見へマスカといへばハヲナーあれが見へぬかコレ爰の花ぞと指しサア共に折りて慰まんと右の手にて折振をして左の手に移す樣にて暫くの間嬉氣なる顏色にて此日の暮方まで念佛申し〳〵居たりしが暮に及んで遂に眠るが如くに息絶へたり當人臥病中の心得且其狀態を眼の前に感するま丶

（陳嘯浙撰）

○永照寺坊守

養父郡高柳村内八木村眞宗本派永照寺住職尾山正景と云へる人は平素仁慈の心深く信徒の教導も親切なりしが明治二十五年七月二十五日該村より凡そ二里計り隔てゝ字野村あり當村永照寺の檀徒なりしを以て法用參勤の歸途字野川（馬場とも云ふと）云ふ處に小川ありて板橋を架けり然るに當日は朝より大雨降り續き男浪女浪此橋を瀑ほす永照寺住職此の橋を渡らざれは我寺へ歸る路なく渡らんとすれば若し過つて溺るゝこともあらんやと恐れ立歸ねは洪水の爲に此橋必らず流るゝならん然るときは此の洪水の減じて後再び橋を架る迄は徒らに日を費すのみならず我が（八木村）門徒の種々謗くを如何

せんと此橋に向ふて渡る能はず歸る能はず止る能はず殆んば思案に沈む間も愈増すものは水なれば寧しろ斷念して此橋を早足にと渡りかけし中途俄然一層の荒浪來る瞬時に永照寺住職は兩足を支へられ其儘橋の下に突き流され溺れ苦しむ有樣を見るものも水心なき上にかゝる洪水なれば救ふに用なく溺者は元來調水の術さへ知らされは見る間に墓なく水中に絶命せり寺宅には内室（いさの）三十四歳長男若丸（十八歳）以下三名の男子と三名の姉妹ありて此の報を聞くや一同慨然たる中にも殊に内室の悲歎の狀態一時狂氣の如く見るものの聞くものをして袖を濡さぬものもなき次第なりしが詮方なければ屍體を索めて丁重に葬儀を執行せられたり葬送の後も内室の愁傷一方ならず愚痴の涙乾く間もなかりけるが或時智識の教化によりて目を

醒されてより氣を取り直し見ればアー生死事大無常迅速の境界死の緣無量とあれば、かゝる死を遂げられしも皆是れ前世の業因の顯れなれは遁るべきに非ず我が院主の存生中常々の御教化ありしも此事なりしをやと思い當り夫れよりは專ら聞法に志を厚くせられ凡べて說教とあれば遠近を問はず足手を運びつゝありけるが何時の頃とかや難有了解を頂き佛祖の崇敬は勿論眞俗につけ奇特の所業少なからず就中尤も感心すべきは此永照寺門徒三百戸計り（五十町或は百町隔てゝ二戸三戸の檀徒もあり）なれとも未だ老年の聲のかゝらぬ婦人の身ごして住職の死去せられし以來東奔西走て門徒の人に勸る樣生死は無常死の緣無量なれば壯健な內に御手强き御本願の御謂れを聽聞して賜れと最も懇ろに諭すを以て常ごし寺宅へ歸らは長男若丸二男廓然等を膝近く招き寄せ御身達は衆生化益の祖師樣の末弟にして如來樣の御代官を勸る身なれは何卒學問に出精して御法義の隆昌を謀り一人導けは一人正定聚の生菩薩を作る重大の責任者なれは努々忘れ賜ふ勿れと又長女（ふじを）次女（みするゑ）等に對しては汝達は成人の後は如何なる處へ緣ありて嫁くとも婦人は第一質素を旨ごし行狀を正しくして子あれば善良に育てゝ以て弘法の器ごなることを願い兼て門徒に家を興す兒童を養育する摸範ごならば御本山の大善智識樣は御滿足あらせられ皇國にありては大利益を殘すことになる何故なれば佛法弘布に盡力せば自ら佛法繁昌するに隨いて何れも道德を守るやうになる道德が次第に全世界に漫延ると皆善良の人ごなりて國法を犯すものなきに至るすれば御上の御厄介も省かるゝ事にな

れば夫に費す夥しき日費が悉く國益となる程にこの道理を解きて諭し亦其身は日々佛法聽聞を第一の娯樂とするが故に所々の寺へ參詣して聞法の時は一大事に喜行住坐臥如來聖人の御恩を思ひ浮べて稱名念佛する等其行狀の殊勝さは本山出張の巡教師並びに如何なる人も感ぜざるはなしかゝる厚信に靡きて地方の自他宗日々眞宗に歸依する者多く誠にこれぞ眞宗末寺の坊守の本分を盡す好き模範と大ひに感覺も受けしまゝを筆に任せて誌せしものなり末寺坊守茲に鑑み賜はんことを切望するの外なし　（釋暻演撰）

○不思議の御本像

養父郡八鹿村内綱場村田中係八は拾年前女房なか長男係市娘とめと家内四人同道にて京都本願寺へ參詣し七條通りの或店にて御長六寸

（但し曲尺）計りの船御光の御木像を求め歸りて以來我家の内佛として給仕せるが昨年九月隣家の植田勘七なるものへ依托して御長二寸の御本尊を本山より申請け並に町版の祖師と蓮師の御掛添を求め歸られてより御木像を佛檀外の彼處此處と安置の場所も定まらず誰かに讓り度きものと思ひ兎角御無沙汰にのみ取扱ひ居たる由然るに昨年十一月二十日晩より内佛にて祖師忌を營むに付き係八御佛檀の御掃除をなさんとする際前日より御本尊より左の方隅に安置せし御木像を取直さんとするに聊かも動かず驚きて家内の者に如何せしことなきやと問ふに何事も知らずと答ふる故當人は尚更怪んで再三力を迄めて取除げんとすれども更に動かざれば其儘にして當夕貧道當家の齋に就きしに城崎郡三江村西教寺住職宮垣信海氏も當家に招か

れ同席にて在りしが孫八語るに右子細を以てす互ひに不審を懷きながら早速口を漱ぎ手を清めて五條袈裟を着用して試みに御木像を動かし見るに宛然釘付したるが如し實に恐れ入て熟考へ見ばれ此御木像を他人に讓り度きも求むるものなければ不用の道具の如くに思ひし故一寸片付け置きしが（其證據タルヤ眞正面ニ非ズ）御揺ぎなきは居處も定まらぬ此木像も愛想つかずに此隅に置いて呉れよとの思召にも彷彿たり

何ぜう孫八に御緣の厚きが致す處か不思議の事もあるものかな夫より今日に至るゞ同機なれば此由を聞風する遠近の有志日々孫八方へ參詣するもの毎に動かし見て結緣に

茲に於て貧道檀中と議り吾が本堂へ此御木像を御迎へ（佛檀共）本月一日逮夜より今日中に至り木佛供養會を執行み鄭重に三經を讀誦し一枚紙に

此の御木像へ手を觸るゝ事堅く禁ず

と書し扉に貼りて即尅孫八方へ奉送せり

（于時明治三十五年一月二日午後三時日本一掲載）（同人撰）

◎釋曠演雜咏

盡さはやと思ふ時にぞ孝行は

つくせはかなき此身なりせば

たへしのべ喜きも惡しきも皆やがて

一つ蓮の身にしなりせば

善惡の因果ぞいふはうてば鳴る

叩けばひゞく借れば催促
山鳥の聲聞くだにも晴れをしる
來いの御聲に心やすめよ
世話したい心に長くほだされつ
助けたまへは世話のすたり場
有がたふないと皆人いふけれど
ありがたふない御慈悲ではなし

但馬
妙好人傳畢

明治四十三年六月一日印刷
同　年六月五日發行

著者　山田瞭演

但馬國城崎郡日高村

發行者　谷本馬藏

京都市下京區醒ケ井通魚棚上ル
佐女牛井町三十二番戸

印刷者　小林庄兵衛

佐々木和上題字　山田暸演著述

●眞宗之葩　一名説教法話の材良

定價金貳拾五錢　郵税金四錢

本書は德義を以て其名を知られたる山田暸演氏が無常、安心、報謝、師德、法度、法話雜錄、稀有、通信の九部に分ち各部に最も當今の情勢に適したる簡短の譬喩を交へ古實を類して如何なる童男童女と雖も了解し易きやう懇篤に辯述せられたる珍書にして今回佐々木和上の校閲の上題字を得て出版せしものなれば僧侶諸師は説教法話の好き友となり信徒諸君は法味愛樂するの指南車となるべきものなれば幸に能書よりも速に木書を購ふて其實味を嘗め賜へ

山田暸演師編

●見聞一致　欣淨談

實價金五錢　郵税三冊迄金貳錢

山田暸演師著

●布敎材料　滑稽合法集

實價參拾五錢　郵税六錢

(目錄)他行とは酩酊して午睡して居る事○手紙の原因○盲燈提持て人に當る○壺ハ金米糖○周章者伊勢參宮○盲聾鼈○談僧の興○官員の幾○榮蝶○風呂屋の大黒○娘の兩肩○提燈で憐寸○半分は垢○難產に銅の鳥井○橋の節穴より扇子○狸布施○夫婦鯛の爭○三人同臥○一の字○川でなくしたもの○實ト者に一本○山家の灰餠○くり〱坊主○曉の鷄○片破月○鳥雀の父子○雁首なり○十二年禁酒○正月か來る○大酒家父子○二人千鳥○睡丞記○十德○外は利が食ふ○奈良橋の男○有名無實の猫○安產質札○十七人南無阿彌陀佛○夫婦無言○有の齒○なふねいが○夫婦金拾ふ爭○尼五尊○月を背の男○禪異問答○無常の使○世界國土○中立男○桶屋大工轉宅○丁稚二つの違ひ○棟木て拜佛○勿體なひ德利○雪隱三厘○幾尿小僧○古鏡○犬の月○閧で握飯○耳の干物○べかこう○いす

ばにやの驢馬○木像を惡くする。四這娘○頭胴不似合の畫。去狀の傍で念佛○鮭の切身を喫烟○猫を見よ○筍の孝行○向の烟を吸ふ○晉直息の芝居○蟹と蛙○毛髭を買ふ男○腐に灸○蟬和尚○慈光○若荷を客○寢た間に三十里○同行表具の軸○西けの芋○世の中に草木○蝙蝠の二心○大切に惡む○五際三從○命有馬の湯○我か戀は○錦のつゞれ○一眼は皿○蛙の京見物○眼鏡で新聞○地獄繪を禮拜○丁稚七時起き○貧神買言○醫師よりは右ノ眼ン引縮て○娘のわひ○墨を眼にぬる○小石々々○進上香々○馬鹿々々○惠比壽鯛五枚○熊卜は納屋○大風に箱○疫神白○尼寐太皷○下女戸棚○廠增や○火の子もやらぬ○兩借空寺○兩替せん○喚鐘の中へ頭○思ふ儘には○六歌仙○茶椀ひいき○皆はとけ○頓智で酒○杞發○削木を蹴る○罪業に蚤○鳥くわ〱○猿舞○皺三十二○壺破見○鉢坊氣遠○一休小僧引導○者になられる○ぬく太郎○蠟を食ふ○四人無言○山芋を轉かす○長付がなひ○野狐ノ牙尾耳○御弊動く○きんになる○塞翁か馬○高慢の鼻○旅人の死婦○翁姜の客齋○七字となへて恥○では惡し○宿印犬○疊屋と屋根屋○のぞがなる○馬の片延○蚊屋倒つり○盤に印○貝吹け○菜虫も○張子の虎○供物を子に頂かす○してこい小借○客をかけたか○腹十文字○かゝらこそ○飯ぶす〱○小豆つけとる○之聚とも○上る風の內職○上りか〱○柳に座頭○梨䍶經○丁株の未開化○芝居緣組○白截七恥○本尊には邪狂も○十九か二十か二十一か○羽織あと四枚○渾子○貧神わらじ○鉄鑿の妻○かさはいごく○佛檀もかい○張子達磨○よりあさ○虎の威○牛が馬草○値はしませぬ○ほの字○名畫。高利貸閉口○見通しの占なひ○龜相な眼鏡買○砂玻璃の歎き○獵主菜取○鏡い裏○親拜め○見せんのはりかへ○四具足哥○小便の飯○赤米四斗○此子ノ年も○米をはふはる○其手な食はぬ○十三里一時にや〱○驟料に銅貨の音○水癲癇○躍らぬ約東で躍る○牛死牛生○一週り遲れた二百余件

發賣元　京都市下珠數屋町東洞院西へ入　護法館

新版廣告

山田瞭演師述
眞宗安心
演說法話
實價金參錢　郵稅三冊迄貳錢

本書は雄辨を以て有名なる山田瞭演師が懇篤に譬諭を交へ古實を顯して辨述せられたる珍書なり

山田瞭演師述
釋迦出世の本懷
實價金壹錢　郵稅七冊迄貳錢

附錄　本光坊數取歌

本書は釋迦一代五十年間の御說法は只々一名號ゃ惠念せしむるに外あらずと云ふ事を云何なる人にも知り易き樣施本たちに述へられたる妙書なり

山田瞭演師述
見眞大師
御一代略詠
一名無漏の明燈

附錄（法義相續）袖萩祭文

實價金貳錢　郵稅四冊迄貳錢

古は古今稀なる新書にして高祖御一代九十年間ノ御化導九十歌に分ちて欠かさず漏さず述盡して又疎ならず密ならず幸に能書よりも早く一本書を得て其の妙を知り玉へ

山田瞭演師述
法義
相續の鑑
實價金貳錢五厘　郵稅三冊迄貳錢

附錄　法眞愛樂の歌

山田瞭演師述
信後の世渡
實價壹錢五厘　郵稅五冊迄貳錢

附錄安樂寺坊守子女教育の口吟

右兩書は眞宗信徒にして可愼信後相續の摸範たるへき事跡古來數ありと云へとも今日時世に適し護法扶宗の實事を顯明せしは又此書の外他に非らざるか幸に試讀せよ

京都市油小路花屋町上ル

發行所　顯道書院

山田瞭演師著
●法味愛樂指南車
實價拾貳錢　郵稅四錢

（目錄）○佛敎の案內○縛曰羅胷地○十刼秘事の辨○三十二相○佛心凡心○十二因緣の辨○得三法忍○今日の布敎○文明の賞典○極樂は衆生の土○衆生功德成就○附錄○和泉式部○私の課業

山田瞭演師著述
●遊妓轉敎誡名開悟
（一名遊女さとし）

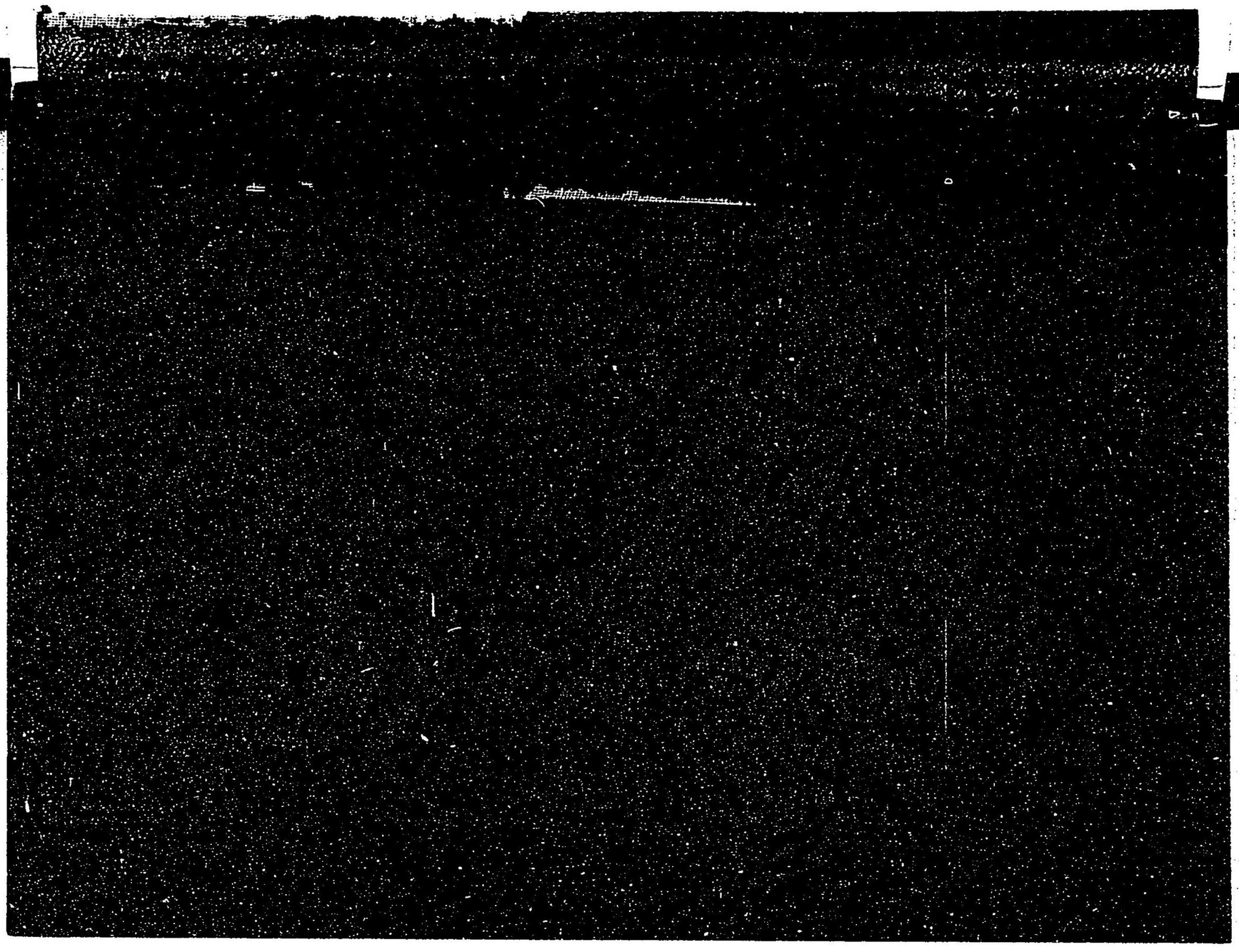
實價參錢　郵稅貳錢

佛心者大慈悲是
憐レミヲ物ニ施コス心ヨリ外ニ佛ケノ姿ヤハアル
佛敎ニ有緣ノ同胞諸兄姉ヨ遊廓ニ沈ミテ憂キ光陰ヲ
屈指シテ年期ヲ待詫ツヽアル全世界ノ藝妓娼妓ヲ憐
レムノ心アレハ此小冊ヲ陸續印刷ニ命シテ全國各地
ノ遊廓へ施本アラマホシクコソ

山田瞭演師撰
●但馬妙好人傳
實價拾五錢　郵稅四錢

發行所　京都市油小路花屋町上ル　顯道書院

D-4/



但馬妙好人傳

山田 瞭演

国立国会図書館

004720-000-1

特47-762

但馬妙好人伝

山田 瞭演／著

M43

ACE-1401